
いちごミルク

りくおう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いちごミルク

【Nコード】

N0759Y

【作者名】

りくおう

【あらすじ】

いつもと変わらない日常。

しかし、それに違和感を感じた時、真の時の歯車が回り出すのです。

それが、人々にとって幸か不幸かなどはお構いなく。

ただ、人は幸せのため、非情な時の流れに抗い、立ち向かっていきます。

自分自身の力で。

序章く鋼鉄の墓標く

陽炎ゆらぐ荒野。

その陽炎の彼方に、二つ三つの黒い山、いや、丘が見える。

丘？

いやいや、それは堆く積み重なったスクラップだった。

錆びた車のフレーム、巨大な建造物を構成していたであろう鉄骨、はたまた、何かの超兵器を彷彿させる鋼の骨格。

それらが、およそ人力では不可能としか思えない位の高さまで積みまれている。

だれが？いつ？

それは、誰も解らない。

だが、

灼熱と言っても過言ではない大地を踏みしめ、一人の女性がその鋼の墓標に向かい、歩みを進めているのは紛れもない事実である。

女性？

照りつける太陽の光を遮る為、サングラスをかけた女性。

それはいい。

ただ、その女性は、そこが灼熱の荒野という事実を周りに認識させるのを拒むかの如く、漆黒のロングコートを身にまとい、さらにその上に、首、胸、肩を防護するアーマー付きのマントを装着していた。

サファイア色の透き通った髪を、たまに吹く熱く乾いた風になびかせ、女性はゆっくりと、しかし確実に鋼の墓標に近づいていった。

細く高いヒールの、ロングブーツの足跡を刻んで。

序章く鋼鉄の墓標く（後書き）

ども。

ここまで読んでいただいております。

至らぬところは多々ありますが、何分若輩者なので、辛抱強くお付き合いただければ幸いです。

第一部く荒野く

「おじちゃん、イチゴミルクちよーだい！」

五、六歳の少女は、その小さな手に握り締めていた銀色の硬貨を台の上に置き、くりんとしたまなこで、じっとこちらを見上げている。

その前に。

そのの兄さん、今、鼻で笑ったろ。

ウチのイチゴミルクを馬鹿にしちゃいけねえ。

ウチのイチゴミルクは、天然イチゴをも超えた酸味と甘味の融合を実現した保存食イチゴと、まろやかで、それでいて、しつこくない甘さのミルク粉を絶妙の割合で配合した新世代アイスクャンデーだ。

このくそ暑い荒野に、五臓六腑に染み渡るイチゴミルク！これ以上の嗜好品は無いってもんだ。

で、

肝心なことを忘れていた。

「おじちゃん！じゃなくて、お兄さん！だろ！」

全く、最近の若いモンは口のききかたがなっちゃんねえ。

20そこそこの好青年を捕まえて、おじちゃん、とは、全く泣けてくるぜ。

「おじちゃん、イチゴミルク！」

「かーっ！聞いちゃいねえよ！このすつとこどっこいめ！はいはい、ほら、イチゴミルクね。まいど。」

「ありがとうー！」

少女は、俺が渡したイチゴミルクを、嬉しそうに食べながら陽炎の彼方へ消えていった。

「ふう。」

俺は、日除けのパラソルを、イチゴミルクの入った冷凍庫が影に入るよう調節し、再び客を待つ。

少女は、ここのお得意様だ。

いや、

少女以外の客は、ここにはこない。

何故？

キイイイン！

俺の頭の中で、不快な音が響く。

まただ。

激しい痛みと吐き気をもよおすこの音は、俺の思考を停止させるには充分だった。

俺が、今の日常に疑問を感じると、必ず響くこの音。

俺はいつしか、時の流れるままに生きるようになった。

明日もまた、少女はイチゴミルクを買いに来るだろう。

俺は、少女にイチゴミルクを渡し、少女はそれを嬉しそうに食べながら、陽炎の彼方に消えていく。

待てよ、

俺は、いつイチゴミルクを作っているんだ？

イチゴミルク用に、仕切りられた冷凍庫は、一本分だけ空きがあった。

俺は、昨日もこのイチゴミルクを・・・

キイイイン！

くそっ！駄目だ！

さっきよりも激しい痛みに襲われて、俺は頭を抱え込んだ。

何故だ？

何なんだ、この痛みは！

痛みに屈伏し、全ての思考が停止しようとした時、少女とは違う影が、痛みでぼやけた視界の中に映った。

「見つけた。」

荒野 其の二

「見つけた。」

少女とは全く違う影は、俺に向かい確かにそう言った。

俺・・・

そう、俺の名は『^{じん}仁』。

そして目の前にいるのは、

わからん。誰だっけ？

漆黒のコートにマント。

このくそ暑い中、正気とは思えないね、全く。

でも、顔立ちはサングラスで目元はよくわからないけど、間違いない美人。

しかも飛びっきりの。

そんな女が、俺を「見つけた。」ときたもんだ。

神様ありがとうー！

「で、ウチはイチゴミルクしか無いんだけど、それでいいかい？」

いかん！何を言ってるんだ、俺は！

「見つけた」て、アイス屋じゃないだろ！

ほら、何も答えてくれないし、何か銃のような物を・・・

それって、銃ですよね？

黒色の、そのT字型の物は、T字の縦棒部分が、貴女の白く美しい手に収まらないってことは、いーっぱい弾が入ってるってことですよね？

それも、ご丁寧に両手に持っちゃって。

あつ、丸いパイプ状の・・・否！銃口がこっちを向いて・・・

タタタタッ！

軽い音とは裏腹に、仁が直前まで座っていた椅子は粉々に碎け散った。

「おわっ！ご、ごめんなさいっ！名前とか、貴女のことを忘れていた事について怒ってるのなら謝りますし、頑張っと思って出しますっ！だから、撃たないでっ！」

間一髪逃れた仁は、スクラップの山の影に逃げ込み、美人だが、迷惑極まりない女に向かい叫んだ。

ガラッ

頭上の音に仁が視点を移すと、スクラップの山の頂上に、漆黒を纏った女が仁を見下ろしてした。

タタタタタッ！

「何でもいつもこいつも俺の話を聞いてくれないんだよっ！」

紙一重で銃撃をかわした仁は、だが、砂に足をとられ、大きくバランスを崩した。

タタタッ！

さらに容赦なく放たれた銃弾は、仁の心臓の位置に吸い込まれるように着弾した。

「がっ！がはっ！い、いてえ！」

仁が痛みにもたうち回るが、血は一滴も出ていない。

「この着流しは耐弾性があるから貫通はしないけど、やっぱ死ぬ程いてえ！」

鶯色の仁の着流しには穴一つ空いていなかった。

「だけど、俺は何でこんなモンを着て・・・」

キィィン！

しまった！余計な事を考えてっ！

痛みと吐き気にフラつく仁に、女はとどめとばかりに発砲した。

ヤバイ！やられる！

弾丸は、今度は着流しに邪魔をされないよう、仁の頭部を確実にとらえようとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0759y/>

いちごミルク

2011年10月31日03時13分発行